琉球大学学術リポジトリ

琉歌歌語「雨」をめぐって

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2007-11-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, Junko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2404

琉歌歌語「雨」をめぐって

前城淳子

はじめに

抒情歌謡で重要なことは、歌の中に描き出された「わたし」《抒情主体》の感情や評価、思想といった《こころ》を表現することにある。琉歌に「雨」「霰」「雪」「雲」「露」「霜」「風」「嵐」「波」「潮」といった自然現象が詠まれることがあるが、これらの自然現象は、《抒情主体》を取り巻く世界を構成するだけでなく、《こころ》が向けられる対象として、また、《抒情主体》に作用し《こころ》を引き起こすものとして描かれている。自然現象は《抒情主体》の《こころ》と密接に関わっているといえる。しかし、自然現象が背景に退いていて他の景物と《こころ》の関係が詠まれていることもある。この場合、前面に描かれた景物には個々の自然現象の持つ意味や情緒が付加されている。また、自然現象を表す歌語が比喩として用いられ《こころ》を表現することもある。

本稿では自然現象を表す歌語の中から「雨」を取り上げ、琉歌で「雨」がどのように描かれているか、またその「雨」が歌の《こころ》とどのような関係にあるかを明らかにすることを目的とする。『南島歌謡大成Ⅱ　沖縄篇下』[一]と『南苑八景』[二]に収録された琉歌の中から、「雨」「雨露」「春雨」「五月雨」「夏雨」「時雨」「夜雨」「大雨」「長雨」「霧雨」「雨降り」「雨風」など、「雨」が詠まれている琉歌を取り出し、分析の対象とする。

琉歌に詠まれた「雨」が、歌の中でどのようなものとして描かれているのか。できごととして描かれた「雨」の

特性によって分類すると次のようになる。

一、植物に降る雨
　①潤す雨　②恵みの雨　③花・紅葉に降る雨
二、戸外での行動の妨げとなる雨
　①路の行き来の妨げ　②旅の妨げ　③雨をおして行動する
三、隠す雨
　①景色を隠す雨　②顔を隠す雨　③笠で顔を隠す
四、雨後の情景
五、雨の情緒
六、比喩の雨
　①雨と涙　②雨と植物　③雨と笠　④雨と御衣かさべ
七、掛詞の雨
八、狂歌の雨

以下右の分類にそって「雨」が詠まれた琉歌について述べていくことにする。

一、植物に降る雨

「雨」は大気中の水蒸気が冷えて水滴となり地上に落ちてくるものであり、「降る」と詠まれる。「雨」が植物に降るとき、「雨」は植物を潤し繁らせ、作物を実らせるものと詠まれる。この植物を潤す雨は豊かな実りをもたらす恵みの雨となり、作物の生育に適度な雨が降ることは統治者の治世を褒め称える表現ともなる。また、花や紅葉に降る雨は、花を咲かせ、紅葉を染めるものであり、反対に、長く降り続く雨は花の色を褪せさせ、散らせるものとなる。

①潤す雨

雨の中でも春の雨は、萌え出る草木の色を濃くし、葉を茂らせる。「春雨」「二三月の夜雨」が「若草」や「野辺の百草」、「苗代田の稲」に降ることによって、「(色が) 染め増る」「みとりさしそへてさかる」といった状態をもたらすのである。それに対して「色のしほらしや」「色のきよらさ」「うれしや」といった肯定的な感情・評価が詠まれている。

(1) 日数降雨に詰て染増る　春の若草の色のしほらしや（琉歌百控・五〇七）

〔日ごとに降る雨にいよいよ濃くなっていく春の若草の色がすばらしい。〕

(2) ふゆるはるさめに野辺の百草も　みとりさしそへてさかるうれしや

（古今琉歌集・一〇〇・春・読み人しらず）

〔降っている春雨に野辺の草草も若葉を添えて生い茂っているのが嬉しい。〕

(3) 二三月（ウリツミノ）の夜雨時々よ違ぬ　苗代田の稲や色のきよらさ（琉歌百控・四四）

〔二、三月頃の夜雨は時期を間違えないで降る。苗代田の稲は色が美しい。〕

「うりつみ」は旧暦二、三月頃の季節を表す語である。この時期の夜雨が時を違えずに降ることが作物の生育にとって重要であり、稲の理想的な状態「色のきよらさ」をもたらす。春の、きまった時期に降る雨は豊作をもたらすものであり、時を違えずに降る「雨」は次節で扱う「恵みの雨」へとつながるものであろう。

次の歌では、柳の色を染める春雨が詠まれている。《抒情主体》の目の前には色を増し青々とした柳があるのだが、それに対して直接「美しい」という評価をしていない。「春雨が柳の色を染めたのだろうか」と春雨と柳の関係を見出したところに、この歌の《こころ》がある。

(4) 降ゆる春雨の染めなしがしちやら　庭の糸柳の色のまさて[三]（琉歌全集・一四五九・春の部・高良睦輝）

〔降っている春雨が染めたのだろうか。庭の糸柳の色がまさっているよ。〕

②恵みの雨

十日ごとに降る雨や、決まった時期に降る雨は作物を豊かに実らせ豊作をもたらす。

次の歌では時を違えずに降る「雨」は「弥勒世」「あまん世」をもたらすものと詠まれている。「弥勒世」は弥勒（豊穣と繁栄をもたらす神）の出現する世、「あまん世」は「甘世」の義で、いずれも豊年、豊穣の世を意味する。

(5) 十日越の夜雨ときたかんあれは　誠弥勒世の近くなとさ（南苑八景・一九三・雅頌）

〔十日ごとの夜雨が時期を間違えないので、ほんとうに豊穣の世が近くなっていることだ。〕

(6) あまん代のむかしくり戻ちさらめ　十日越の夜雨ときもたかぬ（琉球大歌集・一八九・雅頌）

〔豊年の昔をくりもどしたからなのだ。十日ごとに降る夜雨は時期を間違えることがない。〕

次の歌でも「時たかぬ雨」が「世加報」をもたらすと詠まれている。「世加報」は「世果報」のことで、果報のある世、豊年を意味する。時期を間違えずに「雨」が降るのは、「おきやかもひ御世やあめちあひちなとて」と王の統治が良く行われているからであり、(5)(6)の豊作を言祝ぐ歌から王の御代を讃える歌へと移行している。

(7) おきやかもひ御代やあめちあひちなとて　時たかぬ雨のふれは世加報

（天理本琉歌集・二〇七・尚真王御代毛氏野里親雲上安重）

〔尚真王の御代は天と地が相和して、時期を間違えず雨が降るので豊年である。〕

豊作、豊穣をもたらす「雨」は、王の統治がすばらしいことの証であり、豊かな世をもたらす兆候として詠まれ

る。

次の(8)(9)(10)の歌では前節の(1)から(3)の歌と同様に草葉（植物）を潤す「雨」が詠まれている。しかし、前節の歌が「雨」によって色を増した緑が美しい、（葉が）茂ることが嬉しいとするところに主眼があるのに対し、ここでは「雨が十日ごとに降る御代が嬉しい」「十日ごとに降るのは立派な統治をなさる御世のしるし」「豊かな御代のしるしが現れて時を違えずに雨が降る」と「御代」を讃美することに主眼がある。

(8) 草葉うるはしゆる雨露のめくみ　十日こしにふゆる御代のうれしや

（琉球大歌集・三六九・分句・安仁屋里親雲上政章　朝昇）

〔草葉を潤す雨露の恵みが十日ごとに降る御代が嬉しい。〕

(9) 十日越の夜雨草葉潤す　御掛ぼさゑ召る御世の印（琉歌百控・四五三）

〔十日ごとに降る夜雨が草葉を潤すのは、立派な統治をなさる御代の徴である。〕

(10) 豊なる御代のしるしあらわりて　雨露のめくみときんたかん（天理本琉歌集・一〇九）

〔豊かな御代の徴が現れて、雨露の恵みは時期を間違えることがない。〕

「雨露」は万物をあまねく潤し豊作をもたらすものである。「雨」と同じように「露」も植物を潤すものとして詠まれるが、植物を茂らせ、植物の緑を深くする「露」は「恵みある露」「恵みふる露」のようにその「恵み」が

強調される。「恵みある露に千代の色ふかく　そめる若松のなたるきよらさ」（琉球大歌集・二一四・雅頌）、「御めくみのつゆにかはて御茶園や　摘[四]とてもしける千代のみとり」（古今琉歌集・一六二八）のように「松」「茶園」が「露」によって「色深く染める」「摘み取っても茂る」と詠まれている。また、「四方の民草も青葉色そひて　めくみふる露にもたへさかへ」（琉球大歌集・二〇五・雅頌・小禄按司朝恒）では、「露」は「民草」に降りそそいで人々の繁栄をもたらすもの、王のあまねくゆきわたる恩沢をあらわす。「雨露」の場合も「露」と同じように王の恩沢を表すこともあるが、ここでの「雨露」は植物を潤し豊作をもたらす恵みの雨である。

次の歌では「雨」によって「色を添えてさかる」のは「島や国」となっている。「雨」が作物の実りを豊かにし国を豊かにする。

(11)　願の雨はやくふり下ちたはうれ　いろそひてさかる島や国も（古今琉歌集・一五〇五・雑・小禄按司朝恒）

〔願いの雨を早く降らせて下さい。そうすれば作物が豊かに実り島や国も栄えるだろう。〕

次の歌では「雨」によってもたらされるのは「民も楽しみゆる御代」である。時期を間違えずに降る「雨」が豊かな世をもたらす。

(12)　ふゆる雨露の時よたかはねは　民も楽みゆる御代のうれしや

（琉球大歌集・一九一・雅頌・与那原親方良矩）

〔降る雨が時期を間違えないので、民も満ち足りている御代が嬉しい。〕

(13) 雨露の恵み時よたがはねば　民も楽しみゆる御代のうれしや（琉歌全集・一三九七・読人しらず）

〔雨と露の恵みが時期を間違えないので、民も満ち足りている御代が嬉しい。〕

次の歌では「雨」によって「民草の色が増す」と詠まれている。十日ごとに降る雨によって作物の実りが豊かとなり、それによって人々も潤い「民草の色と増る」という状態になるのであろう。

(14) 恵ある御代や十日越の雨に　四方の民草の色と増る（琉歌百控・二六七）

〔恵みの豊かな御代は十日ごとの雨で、全ての民が喜びの色に満ち溢れている。〕

「民草」は人民を草に喩えたものであるが、ここでの「雨」は「十日越の雨」であり、植物を潤す自然物としての「雨」の要素をまだ残しているであろう。「首里きやなし天の雨露の恵み　うけて民草のなひくきよらさ」（天理本琉歌集・三三六）になると、「雨」は国王の遍く潤す恵みの比喩として用いられている（「六　比喩の雨」参照）。

③花・紅葉に降る雨

「雨」は季節の移り変わりを推し進めるものであり、花を咲かせ、紅葉を染めると詠まれる。また、その雨が「つつきふる雨」「長雨」になると、花の色を褪せさせ、散らせるものとなる。この、花を咲かせ、紅葉を染め、花を散らす「雨」は、用例が少なく、また歌も比較的新しいものに偏っており、和文学を学んだ琉歌人が取り入れたものと思われる。

次の歌では花を咲かせる「雨」が詠まれている。

(15) にはのしらきくのうちわらて咲す　よひふたる雨のなさけさらめ（古今琉歌集・二二二・秋・松田賀烈）

〔庭の白菊が笑うように咲いているのは、昨夜降った雨の情けゆえである。〕

この、花を咲かせる「雨」の例は『南島歌謡大成Ⅱ　沖縄篇下』にはこの一例があるのみだが、明治・大正期の題詠琉歌[5]には「音なしにふたる夜半の春雨に　花も紐とけて咲る美さ」（伊江朝英　日曜会「春雨」明治四五年三月一一日付「新報」）、「庭の姫ゆりの雨にひもとけて　すたすたと送る匂のしゆらしや」（伊江朝真　日曜会「雨後夏草」明治三九年七月三日付「新報」）、「なま降る雨にやかて咲出ゆら　朝夕待兼る庭のさくら」（赤田宇世　戊申琉歌会「雨中待花」明治四三年五月一七日付「沖毎」）など、雨によって花が咲くと詠んだ歌がみられる。(15)の歌も、作者が近代の人であり、題詠によるものであろう。

一方、琉歌で花を咲かせるものとして詠まれてきたのは「露」である。「つぼでをるはなにちかづきゆるはべるいつのよのつゆにさかちそゆが」（屋嘉比工工四・五）、「菅てをるはなのよひの間にさちゆす　なさけあるつゆのしのてふたら」（古今琉歌集・三三）など、花を咲かせる「露」が詠まれている。また「露」は花に美しさを添えるものであり、「もいこ花小花ものも言やぬばかり　露にうち向かて笑て咲きゆさ」（琉歌百控・一一）、「みれはうれしさやにはのましうちに　露ふくてはなの咲るきよらさ」（古今琉歌集・八六）のように「露に向かって咲く花」「露を含んで咲く花」は美しいものとして詠まれている。

次の歌では紅葉の色を染める「時雨」が詠まれている。和歌では多く詠まれている紅葉を染める時雨であるが、

琉歌ではこの一例のみである。

(16) 晴るかと見れはやかて打曇て　時雨そめまさる山の紅葉（南苑八景・一四七・秋）

〔晴れるかと見ればすぐに曇って、時雨に染められ色を増す山の紅葉である。〕

明治・大正期の題詠琉歌でも紅葉を染める雨を詠んだ歌は少ない。日曜会の臨時当座「雨中紅葉」題で詠まれた琉歌「紅葉の錦かわて色ましゆさ　情ある雨の恵うけて」（大田朝助　明治四〇年一月二二日付「新報」）に見られるのみである。

花を咲かせ、紅葉の色を染める「雨」であるが、植物に降る「雨」が「つつきふる雨」「長雨」になるとかえって花の色を褪せさせ、散らせることになる。

(17) つゝきふる雨に花の色みたそ　さかりいたつらに過すとめは（天理本琉歌集・八五四）

〔続いて降る雨に花の色を乱して、盛りを徒に過ごすかと思うと。〕

(18) あらし長雨のふらぬ間にいまうち　おめかけれ庭のはなのさかり（天理本琉歌集・三七四）

〔嵐や長雨の降らない間にいらっしゃって、ご覧ください、庭の花の盛りを。〕

「嵐」は「咲く花の一枝のがす吹き散らす　ひと盛り待たな無情の嵐」（琉歌百控・五四五）、「禁止やまたならね可惜わかにはの　もみち葉よちらす無情のあらし」（古今琉歌集・二七一）のように、花や紅葉を散らすものと詠まれる。この歌では「散らす」の語はないが、花の盛りを無駄にするものであり、花を散らす雨であろう。

明治の題詠琉歌には、「庭の春雨や与所にふりながす　詠めゆる花の盛りたいもの」（仲吉朝真　友竹亭「雨中春庭」明治四一年六月二日付「新報」）、「我か庭やしはし情けあり時雨　散る紅葉のおしさあもの」（喜舎場盛文　清音社「時雨」明治三五年一二月五日付「新報」）など、花や紅葉を散らす「雨」の例が見られる。

二、戸外での行動の妨げとなる雨

「雨」に「濡れる」ことは忌避される。そのため、「雨」は恋人の元への行き来や、旅、花を見たり若菜を摘むという人々の活動の妨げとなる。恋の歌では恋人が目的地に着くまでは「降らないでくれ」と詠まれ、恋人が帰るのを引き留めるために「雨が降ってほしい」と詠まれる。また、「雨」は帰りが遅いことや約束の場所に行かない理由ともなる。旅を詠んだ歌では、「雨」に濡れることで旅のつらさ、困難さを表す。このほか、妨げとなる雨をおして戸外に出て「花を見る」「愛しい人のために若菜を摘む」ことが「花」や「愛しい人」に対する思いの強さを表す。

①路の行き来の妨げ

恋人が路を行き来する際に雨に濡れないように「たまの約束の今宵なのだから降らないでくれ」「恋人が（目的

地に）着くまでは降らないでくれ」と「降らないでほしい」と詠まれ、帰ろうとする恋人を引き止めるために「かきくもて雨のふらなやすが」「しはしおふ雨のふらなやすか」「滝ならそ雨のふらなやすか」のように「降ってほしい」と詠まれる。

次の歌では、恋人と会う約束の夜、その行き来の路の妨げとなる雨に「降らないでほしい」という《こころ》が「なさけあてたはうれそらしける雨も」と詠まれている。

(19)　なさけあてたはうれそらしける雨も　たまにやくそくの今宵やれは

（古今琉歌集・四七四・恋・読み人しらず）

〔情けがあってください、空を過ぎる雨も、たまに会う約束の今宵であるから。〕

「そらしける雨」は空を過ぎる雨、降る雨のことを表す。『南島歌謡大成Ⅱ　沖縄篇下』は「空から繁く降る雨」と解釈しているが、動詞「茂る」は植物が生い茂る意で、雨が甚だしく降る意で用いられた例は見られない。また、「しける」を程度が甚だしいさまを表す形容詞「繁さ」とするには語形があわず、動詞「過ぎる」と解釈するのが妥当であろう。

次の歌では「雨は雲に宿ってください」と、恋人が花の島に着くまでは雨に「降らないでほしい」という《こころ》が詠まれている。

(20) なま降ゆる雨や雲に宿めしやうれ　里が花の島いまゐる間や（琉歌全集・二〇七〇・相聞歌・読人しらず）

〔今降る雨は雲に宿ってください、恋人が花の島にいらっしゃる間は。〕

恋人と一緒にいる場合、恋人が帰るのを引き止めるために降ってほしいと詠まれる。

「よしむことの葉もたゐて」「まてといふすもやくめさの」と、言葉では相手を引き止めることが出来ないので雨が降ってほしいと詠む。

(21) あはれ里よしむことの葉もたゐて　かきくもて雨のふらなやすか

（古今琉歌集・一一七九・雑・読み人しらず）

〔ああ、恋人を引き止める言葉も絶えてしまった。にわかに曇って雨が降ったらよいのに。〕

(22) 故もなひもまてといふすもやくめさの[六]　しはしおふ雨のふらなやすか（天理本琉歌集・四六四）

〔理由もなく待ってと言うのは恐れ多い。暫し大雨が降ってくれたらよいのだが。〕

次の歌では「番上り（奉公）」のために出て行く恋人を引き止めるための「滝ならす雨」「たんちや越す雨」が降ってほしいと詠む。

(23) 明日からのあさてさとか番のほり　滝ならそあめのふらなやすか（古今琉歌集・九五三・雑・恩納なへ）

〔明日から明後日は愛しい人の番上りである。滝のような雨が降ったらよいのだが。〕

(24) あちやからのあさて里が番上り　たんちや越す雨の降らなやすが（琉歌全集・三二・恩納なべ）

〔明日から明後日は愛しい人の番上りである。田の畦を越えるような雨が降ったらよいのだが。〕

次の歌は「城から下てさんときのかきり　誰によくさりてなまていまか」（天理本琉歌集・一五三）の返歌として伝えられているものである。城からの帰りが遅れた理由を激しい雨が降ったからだとする。(26)の歌は(25)の歌の返歌。いずれの「雨」も路の行き来の妨げとなる「雨」である。『天理本琉歌集』には作者名が記されていないが、『琉歌全集』では尚久とその愛妾の歌としている。

(25) よくさりもあらんすかさりんあらん　至極雨降となまてちやへる（天理本琉歌集・一五四）

〔誘惑されたのでもない、嫌されたのでもない。あまり雨が激しく降ったのでこんなに遅くなったのだ。〕

(26) 至極雨てすん時の間とふよる　ちやはるふる雨の世界にあよめ（天理本琉歌集・一五五）

〔あまりひどい雨といっても一時の間降るものだ。終日降る雨が世の中にあるだろうか。〕

次の歌では「雨降り名付けてこならは」と約束の場所に来ない理由として「雨（雨降り）」が詠まれている。

(27) 桑むりなづけて上の山まちゆよらばいまうれや　雨降り名付てこならはよもんしやはてんしや我事かぎゆめ　事やかかねども馴し俤のまさて立ら（琉球大歌集・一四九）

〔桑の実もぎに事寄せて上の山で待っているからいらっしゃい。雨降りを理由に来なかったらいいですよ、私は別段困ることはない、困ることはないのだが、慣れ親しんだ面影がいっそう立つことだろうよ。〕

②旅の妨げ

旅は慣れ親しんだ土地や親しい人々から離れ、孤独でつらいものとして琉歌に詠まれる。旅立ちの際や旅の道中に降る「雨」は、旅人を濡らし、旅の困難さ、つらさを増す。

(28)の歌は旅人を見送る者の立場で詠まれた歌である。時雨は秋から冬に降る通り雨であり、その冷たい雨に濡れながら旅立つことが旅の困難さ、つらさを増す。「旅立のしくれぬりなけなやらち」と、旅立ちの際のつらい状況を示して旅人への思いを詠んでいる。

(28) 旅立のしくれぬりなけなやらち　しらぬ名護羽地やとかしちやら

（古今琉歌集・二四八・冬・読み人しらず）

〔時雨に濡れながら旅立たせたが、見知らぬ名護や羽地で宿をとっただろうか〕

次の歌では「住み家を出る」「慣れない山道」「雨風に濡れる」とつらい状況を並べることで旅のつらさ、困難さを表している。

(29) 住家立越て馴も山路に　雨風に濡て歩て行さ（琉歌百控・三五七）

〔住み慣れた家を出て、慣れない山道を雨風に濡れて歩いて行くよ。〕

③雨をおして行動する

「雨」は戸外での行動の妨げとなるものである。柔らかく降る「春雨」であっても、雨に濡れることは避けるべきものであろう。「春雨」に濡れながら「花を見る」「若菜を摘む」ことで、花や若菜を贈る相手への思いの強さを表す。

次の歌では「春雨に濡れても花を見に行きたい」と花が散ることを惜しむ思いの強さを表している。

(30) 春さめにそてやぬれらはもはなの　ちりとはぬうちにむちて見たな（古今琉歌集・九・春・尚泰侯）

〔春雨に袖は濡れても、花が散り飛ばないうちに出ていって眺めよう。〕

次の歌では「春雨」に濡れる困難を乗り越えて摘んだ花を与えることで相手への思いの強さを表す。

(31) はるさめにぬれてつみとたる若菜　おんちゆ故ほかにたるに呉ゆか（古今琉歌集・六一・春・佐久本喜章）

〔春雨に濡れて摘み取った若菜は貴方より外に誰に与えようか。〕

このほかにも、明治の題詠琉歌には「日々の営み」「衣を干す」「布をさらす」などの戸外での活動の妨げとなる

「雨」が詠まれている。[ヒ]

三、隠す雨

「雨」が降ることによって視界が遮られ、対象を覆い隠してしまう。「雨」によって隠されるものには「野山」や「月」といった景色、恋人の元から帰る際の「顔」がある。

①景色を隠す雨

「雨」は視界を遮り、「野山」や「月」といった対象を覆い隠す。

(32)の歌では春雨を「野山を隠す霞だと思ってしまった」と詠む。「霞」は「はなにやまあらしつきの夜にかすみかゝるつれなさと浮世さらめ」（古今琉歌集・九六六）のように景物（月）を覆い隠してしまうものとして詠まれている。その霞と同じように景色を覆い隠す春雨を霞かと思うのである。また、霞は「春きやら今日や空の雪はれて　四方の山の端にかすみわたて」（天理本琉歌集・三三五）のように春の到来を実感させるものでもある。音もなく降る春雨は霞と同じく、景色を覆い隠してしまうものであり、春の到来を感じさせるものなのである。

(32)　笠に音無いらぬ降ゆる春雨や　野山立ち隠す霞と思て（琉球戯曲集・五六）

〔笠に音もなく降る春雨は、野山を隠す霞だとおもってしまった。〕

次の歌の「待ちかねていた秋の月」とは八月十五夜の月のことである。その月を隠してしまう「時ならぬ雨」が「恨めしい」と詠まれている。

(33) 待兼てをたる秋の御月[八]　時ならぬ雨と百浦めしやの（天理本琉歌集・八四四）

〔待ちかねていた秋の月であるが、時節はずれの雨がたいへん恨めしい。〕

②顔を隠す雨

恋人の元へ通う路は顔を隠し人目を避けて行くものであり、笠や袖に顔を隠し、平松の影、闇に姿を隠して忍んで行く。[九]「雨」も恋人の元から帰る際に顔を隠すたよりとなるものと詠まれている。

(34) ふらはふれ無蔵か戻る道すから　雨やかふかくそたよへたもの

（天理本琉歌集・八五七・音雨恋[一〇]・惣慶親雲上忠孝）

〔降るならば降れ。彼女が帰る道すがら、雨は顔を隠すよすがになるから。〕

③笠で顔を隠す

以下の例は視界を遮るものは「雨」ではなく「笠」である。「笠」は「雨」を防ぐものであるが、恋人の元へ通う時には「笠」は顔を隠すたよりとなるものである。この「雨」と「笠」の語の結びつきが「降る雨をたよりにして笠に顔を隠す」「笠は降る雨を防ぐたより」「雨は降らないけれど笠で顔を隠す」の表現を可能にしている。

(35) ふるあめにたよて笠にかをかくち　しのて行こゝろ与所やしらぬ

（古今琉歌集・四七七・恋・読み人しらず）

〔降る雨をたよりにして笠に顔を隠して、忍んで行く心を他所の人は知らない。〕

(36) 忍ふあとかくそ春のはな笠や　空しきる雨のたよれなたさ（天理本琉歌集・一三八）

〔恋人のもとへ忍んで行く姿を隠す春の花笠は、空から降る雨を防ぐよすがになったことだ。〕

(37) 忍ふ夜の空や雨や降らねとも　笠に顔隠ち忍ふ恋路（琉歌百控・三三三）

〔恋人のもとへ忍んで行く夜は、雨は降らないけれど笠で顔を隠す。それは人目を避ける恋路故である。〕

四、雨後の情景

「雨」のあがった後の情景を詠んだ歌群がある。「雨はれて」「夏くれのすきて」「雨やうちはれて」のように「雨後」であることが歌の中で示される。「雨」は背景に退いていて主要な景物ではないが、「雨」が与える情趣が付加され、景物の美を引き立てたり、景物に涼感を与えたりする。雨後の情景を詠んだものには、「月」「撫子」「蜘蛛の巣」「虹」などが主要な景物として描かれ、「雨」はその美を引き立てるものとして、またはそれを作り出すものとして描かれている。

景物が「月」の場合、「雨」は月を覆い隠す雲や霧を洗い流して「月」の光をいっそう澄んだ美しいものにする。

(38) そらや雨はれてくもきりもないらぬ　すめてゝりわたるふゆのおつき

（古今琉歌集・二六七・冬・高良睦輝）

〔空は雨が晴れて雲霧もない。澄み渡る冬の月が美しい。〕

(39) あめになかされてそらやくも霧も　はれて清みわたるふゆのおつき（古今琉歌集・二七八・冬・渡口政発）

〔雨に流されて空は雲霧も晴れて、澄み渡っている冬の月が美しい。〕

(40) 雨はれてみれはさやかてるつきの　しもの上にうつるかけのきよらさ

（古今琉歌集・二七六・冬・花城康故）

〔雨が晴れて眺めると、さやかに照る月の、霜の上に映る光が美しい。〕

次の歌では夏のにわか雨が過ぎて露を含んだ撫子の花の美しさを詠んでいる。「雨」は撫子の花の上に水滴として残り、露を置いた撫子の美を作り出している。

(41) 夏くれのすきてつゆのたまむすふ　庭のなてしこのはなのきよらさ

（古今琉歌集・一一〇・夏・読み人しらず）

〔夏のにわか雨がすぎて露の玉を結んでいる庭の撫子の花が美しい。〕

次の歌では「蜘蛛の巣にかかる時雨」が詠まれている。「雨」が蜘蛛の巣にかかることで、そこに「玉の簾」のような美を作り出している。「時雨ふるときやたまのすたれ」と、時雨が降ると、蜘蛛の巣は「玉の簾」のような状態になることを示している。「雨はれて」のような直接雨後であることを示す語はないが、雨後の情景を詠んだものである。

(42) 七重八重かけるにはのくふかせに　時雨ふるときやたまのすたれ

（古今琉歌集・二四七・冬・読み人しらず）

〔七重八重にかけまわした庭の蜘蛛の巣に時雨が降った時は玉の簾のようだ。〕

次の(43)(44)(45)の歌では、雨が晴れた後の「慶良間渡にかかる虹」や「水面にうつる影」「日が照っている」という「雨後」の情景が詠まれている。

(43) かき曇て降たる雨やうちはれて　慶良間渡にかかる虹のきよらさ

（琉歌全集・一四七九・夏の部・山里永昌）

〔にわかに曇って降った雨はさっと晴れて、慶良間の沖にかかる虹が美しい。〕

(44) 時雨ふる間とみつやなみたちゆる　はれてさめかけのうつてみゆす

（古今琉歌集・二三六・冬・小橋川筑登之）

〔時雨の降る間こそ水は波立つものである。ああ、晴れたのだ、影が映って見えるのは。〕

(45) 笠に音立て降たる夏雨や　今や打晴て日と照る（琉歌百控・三一一）

〔笠に音を立てて降った夏のにわか雨は、今は晴れて日が照っている。〕

次の歌では「今日は夏の雨も晴れているので、連れだって野に出て遊ぼう」と詠まれている。雨後の具体的な景物は描かれず、「夏雨」が晴れていることだけが示されている。夏雨が晴れた野に出て遊ぶことは、喜ばしいことであり、積極的に相手を誘う理由となる。

(46) てかやうおしつれて野に出てあそは　今日やなつくれもはれてをれは

（古今琉歌集・一二五・夏・外間現敬）

〔さあ、連れだって野に出て遊ぼう。今日は夏の雨も晴れているので。〕

この歌のように「連れだって遊ぼう（外に出よう）」と詠んだ琉歌[二]には「秋やいろいろの菊の花ざかり　おしつれて互ひに出ぢて見ぼしや」（琉歌百控・三〇二）、「てかよ押列てなかめやいあすは　名に立る今日や十五夜たひもの」（天理本琉歌集・一二六）、「おし列れて互に花の下しので　袖に匂うつちながめやり遊ば　いつも花やさか

り」（琉球戯曲集・五三）、「夏や山河のながれ水たよて　おしつれて互に涼で遊ば」（琉球戯曲集・六六）などがある。雨後の野に出ることは、菊を見る、月を眺め遊ぶ、花の匂いを袖に移して眺め遊ぶ、川で涼んで遊ぶことと同じように積極的に行われるべきものであり、「雨」は野にすがすがしい情趣を付加しているだろう。

次の(47)の歌は「夏雨」の特性「夏雨が降れば風が吹く」を詠んだものか。

(47)　乗あて舟たいものみすく条理　なつくれのあては風のあもの（天理本琉歌集・七三八）

〔乗あて舟〈未詳〉なのだから、みすく〈未詳〉も条理だ。夏雨が降れば風が吹くのは当然だから。〕

題詠では、「雨」があがった後の風情を「雨後」題、「雨」の中の景物の風情などを「雨中」題として他の景物と取り合わされて詠まれる。明治・大正期の題詠琉歌にも、「雨後夏月」「雨後夏草」「雨後水鶏」「雨後蝉」「雨後眺望」の「雨後」題、「雨中紅葉」「雨中鷺」「雨中撫子」「雨中柳」「雨中菖蒲」等の「雨中」題が見られる。[二二]

五、雨の情緒

「雨」は《抒情主体》に「さびしい」「つらい」という感情を引き起こす。雨音は「さびしい」と詠まれ、夜の「雨」は友や恋人に会いたいとの思いを強くさせる。「さびしい」という感情を引き起こす「雨」が一般的であるが、眠れずに一人居る、旅宿で眠れずにいるときの雨音を「慰めになる」「嬉しい」と詠み、「しみじみと降る春の夜雨」

を嬉しいものと詠むことがある。

次の歌で、「さびしさ」や「つれなさ」という《こころ》を引き起こしているのは「雨音」である。

「竹の葉に音を立てる晩の時雨」「辛い思いをしている時の雨音」「一人で寝ている時の雨音」はいっそうさびしさを増すものである。

(48) かにもさひしさめにはの竹の葉に　しけくおとたちゆるはんのしくれ

（古今琉歌集・二七〇・冬・城間恒謨）

〔こんなにもさびしいものであるよ、庭の竹の葉に激しく音を立てる晩の時雨は。〕

(49) 只にやちやうも難面朝ま夕間暮ち　詰て淋さや雨の音声（琉歌百控・二九三）

〔ただでさえも辛い思いをして朝夕暮らしているのに、いよいよさびしいことよ、雨の音は。〕

(50) まくらそは立て一人ねのそらに　きくもつれなさやふゆの夜あめ（古今琉歌集・二五九・冬・花城里之子）

〔枕を敬てて一人で寝ている時に、聞くのがつらいことであるよ、冬の夜雨は。〕

「雨」は人の訪れを絶えさせ、さびしさを感じさせるものである。特に「夕まんくり」「雨の夜」「あめの今宵」など、さびしさを引き起こすのは夜の雨である。

夜（夕方）の雨は《抒情主体》をさびしくさせ、「友が来てくれないか」と思い、「慣れ親しんだ人の面影がいっそう立」ち、人恋しくさせる。

(51) 雨の夕まんくりやくゝてるさあれは　同志よかしともて待としゆたる（天理本琉歌集・四九五）

〔雨の夕暮れは心さびしいので、友が来てくれないかと待っていたのだ。〕

(52) 雨の夜や常に替て馴そめし　人の俤のまさてたちよさ（天理本琉歌集・四一三）

〔雨の夜は普段と異なり慣れ親しんだ人の面影がいっそう立つことだ。〕

(53) 居もをられらぬ程に俤の　立は恋しさやあめの今宵（天理本琉歌集・五二一）

〔じっとしていられない程に面影が立てば、恋しいことだ、雨の今宵は。〕

(54) さつき雨ふとさひしもの　無蔵かきよらとめは音もないらん（天理本琉歌集・六一八）

〔五月雨ほどさびしいものはない。恋人が来るかと思えばその気配もない。〕

さびしい《こころ》を引き起こす「雨」「雨音」であるが、眠れずに一人いる、旅宿の寝覚めという状況では「慰めになる」「嬉しい」と詠まれている。

(55) 思事のあれは寝られらぬ独い　夏の夜の雨と伽にしゆて（琉歌百控・五一一）

〔物思いをして一人眠れずに、夏の夜の雨を慰めにしている。〕

次の歌は「尚穆様御巡検之時大与那原親方御召附にて所々名所にて之歌」として十四首あげられている中の一首である。本来ならばさびしさを喚起する「雨音」であるが、国王の御召附という特別な状況下で「嬉しい」と詠まれている。

(56) ふる雨の音に枕ら側立て　旅宿の寝さめ聞か嬉しや（天理本琉歌集・一九四）

〔旅宿で眠れずに、枕を欹てて雨が降る音を聞くのが嬉しい。〕

次の歌では、「雨」が降ることが嬉しいという感情を引き起こしている。春の夜雨が降ることが春の到来を感じさせるのであろう。「しみじみと降る春の夜の雨」が「真珠の玉を散らすよりも一層嬉しい」と詠まれている。

(57) 珠散らすよりもまさて嬉しさや　しみじみと降ゆる春の夜雨（琉歌全集・一四二四・春の部・尚鶚泉）

〔真珠の玉を散らすよりも一層嬉しいのは、しみじみと降る春の夜の雨である。〕

六、比喩の雨

「雨」はその形状の類似から涙の比喩として用いられる。涙の流れるさまを雨の降るさまにたとえたり、激しく涙を流すことを雨と比較することによって表現する。降る雨は涙であり、袖を濡らす雨は涙の隠喩として用いられる。また、植物を潤す「雨」は「嬉しさ」「豊作」「王の恵み」の比喩として用いられ、「雨」の縁語である「笠」は関係の緊密さを表す比喩として用いられている。

①雨と涙

「雨」は涙の比喩として用いられる。涙が流れるさまを雨が降るさまと類似のものとして並列したり、「五月雨のふるよりもまさる涙」のように比較の対象として「雨」が詠まれる。また、「夏雨る涙」のように激しく流れる涙のさまを表す。さらに、「雨に袖を濡らす」「降らぬ雨に袖を絞る」など、「雨」が濡らす対象が「袖」になると、「雨」は「涙」の隠喩として用いられる。

次の歌の「涙雨」は「涙の雨」のことで、涙が流れるさまを雨が降ることにたとえた表現である。

(58) 涙雨降らちかねれはも里や　この世ふり捨ててあの世いまうち

（琉歌全集・二三三一・哀傷歌・読人しらず）

〔涙の雨を降らせて引き止めても私の恋人はこの世をふり捨ててあの世にいってしまわれた。〕

次の例では私が声を立てて泣くことと、雨が降り、風が吹くことが対比されている。

(59) 雨もふりつめれかせも吹つめれ　我身も声たてゝなかんしゆもの（古今琉歌集・一五二九・雑・漢那庸森）

〔雨ももっと降れ、風ももっと吹け。私も声を立てて泣こうものを。〕

次の歌では「五月雨が降るよりもまさる涙」と「涙」の程度が「五月雨」と比較されている。

(60) おもひみたれ五月雨の　ふるよゑんまさる我身のなみたや（天理本琉歌集・七二一）

〔思い乱れて、五月雨が降るよりもまさる、私の涙は。〕

「夏雨れる」は雨がにわかに降ること。ここでは涙が激しく流れるさまを夏雨にたとえたものである。この歌は組踊「大城崩」で「をなぢやら（大里按司の妻）」が捕らえられた二人の子虎千代、金松を探し歩く場面で歌われる。

(61) 我謝と与那原の浜に鳴く千鳥　きけばよくまさて二人が面影の　わが袖にすがてはなちはなさらぬ　住馴れし城見だんてやりすれば　夏雨れる涙かきくれて見らぬ　歩まらぬ浜路あとに立戻る　足もひかれらぬ胆くれていきゆん（琉球戯曲集・九八・大城崩）

〔我謝と与那原の浜に鳴く千鳥の声を聞けば思いがいよいよまさって、二人の面影が我が袖にすがって

離すことができない。住みなれたお城を見ようとすると、夏雨のような涙でくもって見えない。悲しみに歩む足も重く浜路をあとにすると足はいよいよ重く、心が闇のように暗くなっていく。〕

次の歌では「屋久名嶽に降る霧雨は恋人の涙だ」「降る雨は花が引き止める涙と思う」と、「雨」を「涙」に見立て、表現されている。

(62) 屋久名嶽見は霧雨のふよん　霧雨やあらぬ無蔵か御涙（琉歌百控・七〇）

〔屋久名嶽をみると霧雨が降っている。霧雨ではない、恋人の涙だ。〕

(63) 降る雨や花のひきよしむ涙と　思なちやめ我身も共にぬれて（琉歌全集・二一三一・相聞歌・小橋川朝昇）

〔降っている雨は花が引き止める涙と思ったのか、私も一緒に濡れている。〕

「雨」の濡らす対象が「袖」になると「涙」を表す。「袖に降る雨」「降る雨に袖を濡らす」、「雨は降らないけれども袖を濡らす」、「降らない夏雨が袖を濡らす」「降らない夏雨に袖を絞る」「空の知らない雨が袖を濡らす」などの表現があり、いずれも「涙」を表している。

(64) 恨しや無蔵が照る日や照そ　わ袖降雨の朝も夕さも（琉歌百控・二九五）

〔恨めしいことだ。愛しい人よ、太陽として照らしてくれ。私の袖に降る雨が朝も夕もやむことがない。〕

(65) しけく降る雨に独り袖ぬらち　恋しあかつら　や歩みかねて（琉球大歌集・三〇八・古跡附名所）

〔激しく降る雨に一人袖を濡らして、恋しい赤津浦は歩みかねている。〕

(66) あはらやにつきやもる　あめやふらねとも我そてぬらち（古今琉歌集・七六一・仲風・高宮城里親雲上）

〔あばら家に月の光が漏れている。雨は降らないけれども私の袖を濡らしている。〕

(67) 月やもるあはらやに　雨やふらねともわ袖ぬらち（天理本琉歌集・六四八）

〔あばら家に月の光が漏れている。雨は降らないけれども私の袖を濡らしている。〕

(68) つれなさや浮世雨やふらぬすか　上下もともにそてよぬらち（古今琉歌集・一五二七・雑・漢那庸森）

〔つらいなあ、この浮世は。雨は降らないが上も下も一緒に袖を濡らしている。〕

(69) 里前御船送てもとる路すから　ふらぬなつくれのわそてぬらち

（古今琉歌集・一一七五・雑・読み人しらず）

〔恋人の船を送って戻る道すがら、降らない夏の雨が私の袖を濡らしてしまった。〕

(70) かなし川のぼて加那とめて行けば　降らぬ夏ぐれにみ袖しぶろ

（琉歌全集・二八九四・大島民謡・読人しらず）

〔かなし川を遡って愛しい人を探していくと、降らない夏の雨に袖をしぼる。〕

(71) 恋し津波村や知らねども親子　肝の思出しど道しるべと思て　とまいどまいに行きゆる旅立の袖に　掛る白玉や降らぬ夏ぐれか　歩で歩まらぬ山路踏分けて　頼む津波村や今ど着ちやる（琉球戯曲集・一二二）

〔恋しい津波村は知らないけれども、親子そろって心に思い出すのを道しるべだと思って、探して行く旅立ちの袖に、かかる白玉は降りもしない夏雨であろうか。歩むに歩めぬ山道を踏み分けて頼みにした津波村に今着いたことだ。〕

次の歌の「空知らぬ雨」は空の知らない雨の意。「空の知らない雨が袖を濡らす」で「涙」を表現している。

(72) 逢わぬ夜の笠やいらぬものさらめ　空しらぬ雨の吾袖濡らち（屋嘉比工工四・四四）

〔恋人に会えない夜の笠は要らないものだ。空の知らない雨が私の袖を濡らしている。〕

次の歌では「袖に散り落ちる涙を恵みの雨に置き換えてほしい」と詠んだものである。「涙」が「袖に降る雨」と表現されることをふまえ、袖の「涙」を「雨の恵みに置き換えてください」と詠んだもの。

(73) 祈る身が袖に散り落てる涙や　おきかへてたばうれ雨のめぐみ

（琉歌全集・二二六七・哀傷歌・保栄茂朝意）

〔祈る私の袖に散り落ちる涙は、置き換えてください、雨の恵みに。〕

「雨」のほかに袖を濡らし「涙」を表すものに「露」と「波」があげられる。「露」の場合、「袖」に「露」が「降る」「かかる」「散らす」「置く」「宿る」ことで涙を表す。「波」の場合は「波に袖を濡らす」「袖に波が立つ」ことが「涙」を表す。さらに「袖」を「波下の干瀬」や「浦」「波下の鮑貝」にたとえ、袖が涙で濡れて乾く間もないことを表す。

②雨と植物

「雨」は植物を潤し、豊作をもたらすものである。このことから、「嬉しさ」を「旱の頃に雨に会ったようだ」と表現したり、「夕さり降る雨や雪の真米」と「雨」は豊作の比喩となる。また、王の恵みをあまねく潤す「雨」にたとえる。さらに植物を茂らせる「雨」が恋草を茂らせるものと詠まれる。

次の歌は今日の嬉しさは「木草が旱の頃に雨に会った」ようであるとしたものである。組踊「大城崩」の中で、虎千代と金松の兄弟が馬天浜で処刑されることになるが、母の命乞いによって二人とも命を助けられ、今後は敵かたきと思わず和睦しようと、大城若按司と共に躍り帰る場面で歌われるものである。

(74)　けふのほこらしやや木草色かはて　旱しゆる頃の雨ちやたごと（琉球戯曲集・九九・大城崩）

〔今日の嬉しさは、草木の色が変わるほどの旱の頃に雨に会ったようだ。〕

次の歌の「夕さり降る雨や雪の真米」を逐語訳すると「夕方降る雨は雪の真米」となる。「雨」と「雪の真米」が同じ物として並べられていて、「雨」は豊かな実りの比喩となっている。

(75) 筵敷き待れ畳敷き待れ　夕さへ降雨や雪の真米（琉歌百控・五）

〔筵を敷いて待っておれ、畳を敷いて待っておれ。夕方降る雨は雪のような米の豊作を約束するものだ。〕

次の歌では首里の国王の恵みがあまねく潤す「雨露」にたとえられている。人民を「民草」と草にたとえ、王の統治がすばらしく人民がよく従うさまを「民草が靡く」と表現している。[一四]

(76) 首里きやなし天[一五]の雨露の恵み　うけて民草のなひくきよらさ（天理本琉歌集・三三六）

〔首里の国王様の雨露のような恵みを受けて、人民が靡くのが美しい。〕

次の歌では「君の御めくみ」を「雨露のように四方に降り残すところはない」と、国王の恵みをあまねく降る雨にたとえている。

(77) 君の御めくみや雨露のことに　四方にふひ残すかたやないさめ（古今琉歌集・一五五三・雑・今帰仁朝敷）

〔国王のお恵みは雨や露のように四方に行き届いて降り残すところはない。〕

次の歌では植物を潤し茂らせる「雨」が恋草を茂らせると詠む。恋草は恋心の激しさを草の生い茂るのにたとえたものだが、その恋草を茂らせるのは「春雨」である。

(78) 春雨の降れば恋草やしげて　哀れ摘で呉ゆる人もをらぬ（琉歌全集・二一〇八・相聞歌・真喜屋実宜）

〔春雨が降れば恋草は繁っているが、ああ、摘んでくれる人もいない。〕

③雨と笠

雨を防ぐ「笠」は、雨が降っている時の頼りとなるものである。「笠」は「雨」の縁語であり、(35)(36)(37)(45)(72)の歌でも用いられている。「雨」と「笠」の語の結びつきの強さを利用し、「雨降りは笠が頼りだ。私はあなたが頼りだ」と私と「里」との結びつきの強さを表現する。次の歌では「笠」と「さと」が頼りにするものとして対比されている。

(79) 笠やあめふりのあまかたか便り　我身やたるたよかさとゝたよる

（古今琉歌集・四八〇・恋・読み人しらず）

〔笠は雨降りの雨よけの頼りとなるものだ。私は誰を頼ろうか、恋人を頼るのだ。〕

次の歌での「梅の花笠」は、梅を、鶯がつくってかざす笠に見立てたものである。春の景物である「梅」と「鶯」を、「梅の花笠」とそれをたよる「鶯」と詠んだもので、「梅」と「鶯」との密接な繋がりを表す。「雨」は「梅の

花笠」と「鶯」の結びつきを強める状況を作り出している。

(80) うめのはな笠やみやまうくひすの　晴間なひぬあめのたよりなたら（古今琉歌集・七一・春・上江洲由恕）

〔梅の花笠は奥山に住む鶯の、晴れ間のない雨をふせぐ頼りになっただろう。〕

④雨と御衣かさべ

次の歌では「雨が漏らない」ことが、愛しい人との共寝がすきまなくかさねられていることをあらわしている。「雨が漏る」ということがらによって、「茅葺き」と「恋人との共寝」が対比され、雨も漏らないほどすきまなくかさねられた「御衣かさべ」を表現している。

(81) 真茅茅ぶきや雨降れば漏ゆり　里が御衣かさべ雨も漏らぬ（琉歌全集・二一三二・相聞歌・読人しらず）

〔茅で葺いた茅葺は雨が降れば漏る。愛しい男との共寝は（少しのすきまもないので）雨も漏らない。〕

七、掛詞の雨

『南島歌謡大成Ⅱ　沖縄篇下』に収録された琉歌集に「春雨」が掛詞として用いられた例が二例見られた。実体としての「雨」の意味は薄れ、「ねたさ」や「恨み」が「晴れる」ことを引き出すために「春雨」が用いられている。

(82) 此間のねたさけふや春雨の　晴て終夜ともにかたら（天理本琉歌集・四〇七）

〔この間まではねたましく思っていたが、今日は春雨が晴れたように心も晴れたので、夜もすがら語り明かしましょう。〕

(83) たまさかにけふや稀に御行合拝て　怨春雨のそらも晴[一六]て（天理本琉歌集・四〇八）

〔まれに今日はお会いすることが出来て、恨みに思っていた春雨も美しく晴れた。〕

明治・大正期の題詠琉歌に「春雨」に木の芽が「張る」を掛けたもの「木のめ春雨のしみしみとふれは　かわて[一七]さひしさや草のいほり」（仲浜政模　日曜会「春雨」明治四五年三月一一日付「新報」）がある。また、「五月雨」も掛詞として用いられ、「五月雨」に「乱れ」を掛けた「ふやかれてあとの肝やさみたれの　晴る間もないさめ袖の涙」（伊江朝真　日曜会「雨恋」大正五年九月一三日付「新報」）の例がある。

八、狂歌の雨

狂歌に詠まれた「雨」には路の行き来の障害となる「雨」、塩焚きの障害となる「雨」、雨降りの後の状態「泥を踏む」と女郎買いをした後の状態「むなてはらて」を比較したもの、「雨」を「父親」の比喩として用いたものがある。

(84) 雨のふてはれて通よたる里や　とちふれかしちやらあてもないらぬ（琉球大歌集・四八五・狂歌）

〔雨が降っても晴れても通ってきた恋人は、妻にほれたのか、来るあてもない。〕

(85) かへりなんいざとつぼりひつかへち　まつしぐら雨に切つち出ぢら

（琉歌全集・二七五二・狂歌・富川盛恒）

〔いざ、帰ろうとつぼりを返して、まっしぐら雨の中を切って出よう。〕

(86) 大中の大瀬道の真中に　幾代あめあられふても居ちゆさ（琉歌全集・二七三四・狂歌・霊庵長老）

〔大中町の大岩は道の真ん中にどれほどの時を経て雨や霰が降ってもずっと座っているよ。〕

(87) 雨の降ら降らや天模様も変て　泊真塩焚きややさなじぬがち（琉歌全集・二七一五・狂歌・読人しらず）

〔雨がいまにも降りそうに空模様も変わって泊の塩焚きはふんどしを脱ぎ落とすほどあわてる。〕

(88) 雨ふりのあとやとろやちやうくにゆい　尾類よへやかあとやむなてはらて（琉球大歌集・四三一・狂歌）

〔雨降りの後は泥でさえも踏むものがあるが、女郎買いをする者の後は無一物である。〕

(89) お恥かしやあても言やなまたなゆめ　子の父親や雨と露と（琉歌全集・二七三三・狂歌・百名朝起）

〔お恥ずかしいけれども言わなければならない、子の父親は雨と露である。〕

注

一　『屋嘉比朝寄工工四』『琉歌百控』『天理本琉歌集』『疱瘡歌　和歌口説古名歌集文』『琉球大歌集』『古今琉歌集』『琉歌全集』の七つの琉歌集と『混効験集』『大島筆記』『校註琉球戯曲集』所収の琉歌を収録している。角川書店、一九八〇年発行。

二　琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵。南苑八景、春、夏、秋、冬、雅頌、規戒、悔悟、哀傷、懐古、古跡、逍遥、謝、別離、羇旅、感慨、書懐、応題、分句、冠首、疱瘡歌、旅歌の二二の部立で、七二五首の琉歌が収録されている。編者は不明だが小橋川朝昇編の『琉球大歌集』と同系統の歌集であり、部立てによって編纂された歌集の一つとして貴重な資料である。

三　明治四〇年一二月三一日付『琉球新報』に掲載された奥の山琉歌会の琉歌三首の中の一首。「雨中柳」題で詠まれた作品で、高良睦輝の詠歌は評点「人」となっている。点者は護得久朝常大人。

四　三句目の「摘」は『南島歌謡大成』の本文では原典通り「滴」とし、注で「「滴」は「摘」の誤植か」としている。ここではそれを採用し「摘」とした。

五　明治・大正期に沖縄で刊行された新聞『琉球新報』と『沖縄毎日新聞』には題詠による琉歌が数多く掲載されている。新聞に掲載された琉歌は『近代琉歌の基礎的研究』（仲程昌徳・前城淳子共編著　勉誠出版　一九九九年）及び『詠み歌琉歌の基礎的研究』（前城淳子　平成十四～十六年度文科省科学研究費補助金若手研究（B））によってまとめられており、本稿で引用する題詠琉歌はその成果によるものである。

六　本文では上句の右に「まてといやはわ身やおやくめさあもの」と異伝が記されている。待てと言うのは私は恐れ多いものだ、の意で異伝歌も(22)と同様、言葉では相手を引き止めることが出来ないので雨が降ってほしいと

詠んだもの。

七　戸外での活動の妨げとなる「雨」には「五月雨の雨のいつからやはれて　日日の営も自由になゆら」（正悦花月吟社「五月雨」明治三六年七月二七日付「新報」）、「わた衣や小袖出ちほせ童び　五月雨のあめも晴てをもの」（護得久朝常「五月雨晴」明治四〇年五月一〇日付「新報」）、「降る五月雨もうち晴てたぼうれ　川に布晒らすかたもないらん」（喜舎場清謙　糸満琉歌会「五月雨」明治四五年七月五日付「沖毎」）、「原も出ららぬ縄縫やひくらす　雨にとちこもる草の庵」（兼嶋景福　奥武山琉歌会「草庵雨」明治四三年二月一五日付「新報」）などがある。

八　二句目「秋の御月」とあるが「秋の夜の御月」か。

九　二人の仲が表沙汰にならないように恋人に会いに行くときにはその顔や姿を隠すと詠まれる。袖で顔を隠す「おもひあるなかや人しきさあもの　袖にかふかくち忍ていまうれ」（天理本琉歌集・二六一）、平松の影に姿を隠す「ひらまつのかげにしのぶあとかくち　いきゆれどもよそのしゆらとめば」（屋嘉比工工四・八五）、闇に姿を隠す「月の影たよて忍ふ跡かくち　しはしむら雲の御縁あらな」（天理本琉歌集・八四三）などの歌がある。

一〇　「音雨恋」は「寄雨恋」の誤記か。

一一　『南苑八景』はこの類の歌を「逍遥」の部にまとめている。和歌では「大井河逍遥に水上紅葉といへる事をよめる（金葉集・二五一）」のように詞書き中に「逍遥」の語は見られるが、勅撰集等で部立として取り上げられることはない。

一二　「雨後」題では取り合わされた景物に美や涼感を添える「雨」の用例が多い。「ふたる夏くりの雲ちりもあ

らて　すたすたと照す月の清さ」（長嶺宗柱　西林琉歌会「雨後夏月」明治四三年六月二八日付「新報」）、「見るも涼しさやふたる夏雨の　草の葉にやとる露の真玉」（真喜屋実真　日曜会「雨後夏草」明治三九年七月三日付「新報」）、「山の端の蝉の声の涼しさや　ふたる夏雨のなくりさらめ」（末吉安由　日曜会「雨後蝉」明治四四年七月一五日付「新報」）などがある。「雨後水鶏」では「ののよしのあとて雨はれてあとに　よもすからたたく小田の水鶏」（金武正宜　西林琉歌会　明治四四年六月九日付「沖毎」）のように雨後の水鶏の声が寂しいと詠み、「雨」は背後に退いている。「雨後眺望」題では「雨やうち晴て日影さす山に　橋のことかかる虹の清さ」（山城宗蔭　奥武山琉歌会　明治四一年六月一九日付「新報」）と雨後の景色が詠まれている。

「雨中」が植物と取り合わされると、柳の色を濃くし、紅葉の色を染め、花を咲かせる「雨」を詠んだもの「降る春雨に青柳の糸や　繰返し返し色とまさる」（仲浜政摸　奥の山歌会琉歌会「雨中柳」明治四〇年一二月三一日付「新報」）、「花よりも清さもみち葉のにしき　そめあけて呉たす雨のなさけ」（伊江朝真　日曜会「雨中紅葉」明治四〇年一月二二日付「新報」）、「降ゆる夏雨に花の紐とけて　すたすたと咲ゆる池のあやめ」（真喜屋実真　日曜会「雨中菖蒲」明治四〇年一〇月八日付「新報」）が多く詠まれる。また、「錦かさねたる大和撫子の　花に夏くれのかかる美さ」（喜友名正恭　戊申琉歌会「雨中撫子」明治四四年八月一六日付「新報」）のような美を添える「雨」や、「雨も雨なさぬあさる白らさきの　ぬれる毛衣やいつかふしゆら」（名護朝直　日曜会「雨中鷺」明治四四年一二月七日付「新報」）のように雨に濡れる鷺に対する《こころ》を詠んだ歌が見られる。

一三　「あかつら」は那覇市若狭の海岸にある地名で、恋人のもとへ通う時に通る場所としての作例が多い。海辺の地名であることから「逢ぬいたつらに戻るあかつらの　よすがさざ波の我袖ぬらち」（琉球大歌集・三一〇）

のように泣くこと（涙）を「波が袖を濡らす」と詠んだ例もみられる。

一四　この(77)の歌と同じく人民を「民草」に喩えた琉歌に「豊かなる御代や民草のなびく　庭の糸柳風になびく」（琉球大歌集・二〇三）がある。

一五　『南島歌謡大成』の本文は「首里きやし」とあり、注で「「や」の下に「な」脱落」とある。ここではそれを採用し「首里きやなし」とした。

一六　四句目の「そらも」は『南島歌謡大成』の本文は「けらも」とし、注で「「け」は「そ」の誤記か」としている。ここではそれを採用し「そらも」とした。

一七　「かわて」の「て」は新聞の印字が不鮮明で読めないが、前後のつながりからここでは「かわて」とした。

参考文献・資料

『南島歌謡大成Ⅱ　沖縄篇下』外間守善・比嘉実・仲程昌徳編　角川書店　一九八〇年

『評音評釈琉歌全集』島袋盛敏・翁長俊郎著　武蔵野書院　一九六八年

『近代琉歌の基礎的研究』仲程昌徳・前城淳子編　勉誠出版　一九九九年

『沖縄古語大辞典』沖縄古語大辞典編集委員会編　角川書店　一九九五年

池宮正治「『琉球大歌集』と『南苑八景』―補完と全貌―」『琉球大学法文学部紀要日本東洋文化論集　第四号』一九九八年

玉城政美「琉歌における〈露〉のモチーフ」『文学』第五七巻第一〇号　岩波書店　一九八九年

玉城政美「琉歌における〈月〉の形象」『沖縄文化研究22』法政大学沖縄文化研究所編　一九九六年

追　記

本稿は二〇〇五年度沖縄言語研究センター研究発表会（於　琉球大学研究者交流施設・五〇周年記念会館　二〇〇五年七月三日）で発表したものに手を加えたものである。発表会では厳しいご指摘とともに多くの貴重な意見を戴きました。記して感謝申し上げます。